

たかなべ
戦中戦後の体験集

ふるさとを伝える会
高鍋町教育委員会

はじめに

高鍋町教育委員会では、高鍋町のボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のみなさんのご熱意によって、「たかなべむかしばなし」を第一集から第三集まで発刊し、高鍋地方に伝わる「むかしばなし」として数多くの方々に読み親しんでいただきました。

本年度は、第四集目として戦中・戦後の体験を町内から募集しましたところ、三十九編のご応募があり、ここに「たかなべ戦中・戦後の体験集」として発刊することができ喜びに堪えません。

時代の移り変わりは目まぐるしいものがあり、十年一昔の感があります。特に世界第二次大戦前後については、テレビ・ラジオ・その他で得る情報もだんだん少なくなり、風化しつつあると存じます。

このようなとき、戦争中若くして従軍し、あるいは家庭を守られた方々が（現在高齢者となっておられますが）貴重なご体験をまとめられ、次の世代へ伝えていただくことは意義あることと存じます。

お寄せくださいましたご体験を読みますと、大変なご苦勞があったのだと今更のように痛感します。外地は勿論、県外、県内、町内あらゆるところで、筆舌し難い戦争中・戦争後の苦しみを味われたことを察し頭が下がります。

どうぞたくさんの方々に、この「戦中・戦後の体験集」をお読みいただいて、その時代の苦勞を察していただければ幸いです。

最後にこの体験集を発刊するにあたり、応募いただいた方々・編集にたずさわっていただいた方々に厚くお礼申し上げます。

平成四年三月

高鍋町教育委員会

教育長 岩 永 高 徳

目次

第一部 疎開学童

○ 沖縄疎開学童	小椋 美義	1
○ 沖縄疎開学童	森 仲吉	4
○ 沖縄疎開学童を迎えて	永友 千秋	7

第二部 軍隊・抑留

○ 戦傷	西村 満	9
○ 命の値打ち	永友正一郎	12
○ 戦争中の私	永友正一郎	14
○ シベリヤ抑留	中村 博	16

第三部 空襲

○ 空襲	福永ミサオ	21
○ 空襲	鳴野老人クラブ寿会	22
○ 猛爆下の塩田作業生徒隊	永友 千秋	23

○ 防空壕と風呂の中	重永 俊夫	25
○ 本庄での戦争の思い出	松岡 美也	27
○ 高鍋最後の大空襲と		

永友家母子の死闘	永友 千秋	29
----------	-------	----

○ 戦争中の鳴野	岩下チドリ	31
○ 空襲と台風	森 アサエ	33
○ 母の一言「先祖の墓の前で	山本ミサオ	33

立派に死んでみせる	永友 千秋	36
-----------	-------	----

○ 空襲	奥村ヤエ子	38
○ 終戦直前の中尾	林 ツタエ	39

第四部 学生

○ 拾ったいのち	瀬戸山治義	42
○ 台湾での戦時下の学生生活	桑野 敏郎	45
○ 我が青春の思い出	河辺 澄子	48
○ 学徒動員	岩村 哲雄	50

第五部 外地・引揚

○ 恐かった船路	六車ヒサエ	53
○ 運命	中尾シヅ子	56
○ 終戦前後	三嶋 敏	59
○ 戦争中モンゴルにて	井上 橘子	61
○ 終戦、翌年三月までの思い出	手塚 貞夫	64
○ 戦中・戦後外地にいて	財津モトエ	68
○ 満州引揚	上野 正英	70

第六部 戦中・戦後の内地

○ 戦中・戦後の米づくり	原 重隆	72
○ 終戦直後	日高マサエ	74
○ 枕崎台風	三嶋 敏	76
○ 戦争中の衣食住	松岡 美也	79
○ 打ちのめされた回想	上野 誠三	81
○ 戦中・戦後	河野 花枝	84
○ 台湾引揚	柳 まつ子	86
○ 塩炊き	森 昭三	88

第七部 その他

○ 韓国の人々と共に	水町 幸子	90
○ 靈魂は帰って来た	後藤ミドリ	92

第一部 疎開学童

沖縄疎開学童

後小路 小 椋 美 義

世界第二次大戦の後半、日本は人手不足、日常生活物資不足となり、学徒動員・女子挺身隊の編成・学童疎開令が決定し、B29空襲も多くなり苦しい状態に追い込まれました。

県では沖縄疎開児童受け入れを計画、昭和十九年九月二十五日、鹿児島県において受け入れ事務を終わり、各市郡代表に具体的に示されました。（県、四百余名児湯一五〇余名）

九月二十八日夕刻、高鍋駅に南風原国民学校三十一人を太田守盛訓導・泊国民学校三十三人を山里義厚訓導の二集団が到着いたしました。直ちに各受け入れ学校関係者は宿舎に案内しひとまず落ち付いた気分になり、皆一同ほっといたしました。

次は引率の太田訓導の話です。

『沖縄出港の時は準備不足であり、乗船も古い商船、



何の防備も無く、約二週間の海上を敵の攻撃を避けながら、昼は島影等に隠れ、夜間の航海で右往左往、ジグザグの航路をとりました。途中、無差別に攻撃、撃沈され輸送船の影は少なくなり、かろうじて鹿児島には半数位上陸、九死に一生を得、命拾いをいたしました。

また、高鍋下車と同時に、南風原の三人が体の不調を訴えましたので、直ちに内田医院近くの家に引き取られ治療が早かったので回復も早く、二人は旅の疲れ、一人は筋炎で手術一週間で宿舍生活が出来るようになりました。

住み馴れない所に來た、十歳前後の学童は、目覚めると、「お母さん、兄ちゃん、姉ちゃん」と呼び、泣きじゃくるのを目の前にして、毎日骨身を切られる思いで疲れ果てました。

このままでは仕方がない。先ずふるさとのことを早く忘れさせ、楽しい毎日の暮らしに向って慰めはげますよう努めました。時が経つにしたがいお互の心も和らぎ、兄弟姉妹同様になりました。

厳しいとは思いましたが、早朝、海岸に立ち、東方遙

拝・海の彼方に向かって大声で軍歌・童謡を歌い、駆け足、体操、正座、いろいろな遊び、ゲームを楽しむうちに、心も落ちつき笑い声も出はじめるようになりました。そのうちに学校生活に心も移り、一番苦しかった三キロの登校・空襲、全く経験のない厳しい寒さにも絶えることが出来るようになりました。

担任教師の親切な指導も受け、学友も多く出来、苦しい中にも何とか疎開生活が二カ年も続き、堀の内っ子となり、農家に手助けに出掛けたり、水田・畑を耕作したりしました。

終戦からの一年間も厳しい生活が続きましたが二十一年十月末、引き揚げの報に接し、楽しみにしていた稲・甘藷の収穫をしないまま、沖縄へ出発しました。

そして、那覇港に着き驚きました。出迎えの人影は全く見当らず、古里は焼野が原、たくさんの子供が両親兄弟を亡くし、全くの孤児同然となりました。

その後二十七年の間、沖縄は、占領治下となり、沖縄県発足（四七年五月）まで苦闘の時代で、言葉ではいい尽くせません。第二のふるさとを忘れぬため、「高鍋疎

開学童の会」を結成し、四十九年七月二十六日高鍋町を一泊二日でお礼訪問を実施しました。

当時の学童は三十余歳の立派な社会人に成長していました。十六人の来訪者との出会いの喜び、また、お別れの感激の涙は実に尊いものでありました。

記

疎開学童の会お礼状

暑中お見舞い申しあげます（中略）

さて先日、私達の心のふるさとである錦地高鍋町を訪問させて頂きました際は、御多忙中にもかかわらず、岩村町長さんをはじめ、皆様方が貴重な時間を御繰合せなつかしい再会の機会を作って頂き、その上歓迎の宴まで催して下さいましたことに対し、心から感謝申しあげます。私達は、何の準備もなすことなく、当時のお世話になりました皆様には是非もう一度お会いしてお礼の言葉を申し述べたい一心でお伺い致しましたのに、またまた皆様方の御厚情にあまえる結果となりましたことを恐縮に存じております。いつに変わらぬ皆様方のお情に接し

ました時は、感激で胸が一杯でございました。

三十年振りに訪れましたたふるさとの山河は、変わりなきものでございますが、町全体から新しい息吹^{いきふ}きが感ぜられ、私達が、今、心から望んでおります平和な緑の町、そして他に類を見ない学園都市に発展しておりますことが、わがことの様にうれしく、今日までの皆様の御努力に心から敬意を表するものでございます。今後とも、私達に、高鍋をふるさとと呼ばせて頂きたく、なつかしい想い出と感謝を心の糧^{かて}として、豊かに生きて行けますことをたいへん幸に存じています。（以下略）

昭和四十九年八月

高鍋疎開学童の会

太田 守盛

外 一 同

沖縄疎開学童

鴨野 森 仲 吉

第二次世界大戦がたけなわになった昭和十九年九月、沖縄県の疎開学童六十余名、指導職員二夫婦、付添父母数名が西諸県郡真幸青年学校（現えびの市）に配置された。私の勤めていた真幸青年学校は、当時の真幸村の皇子原にあり、生徒が山鋤で一鋤一鋤山林を掘り起こし開墾して出来た学校で、総面積五ヘクタール、実習地三ヘクタール余あり、真幸村の農林振興の指導の中心地であった。

疎開学童には青年学校の塾舎（塾生の修業場）を使用してもらった。畳敷の部屋が三つあって学童の生活には適当な広さであった。学童は毎日元気で真幸国民学校に通学していた。

しかし、疎開学童として特別に食糧物資等が配給されることはなく、それこそ「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に耐乏の生活をしなければならなかった。成長盛りの子供が異郷の地でひもじい思いに耐えているのを

見ると戦争中とはいえかわいそうでならなかった。

学童の宿舎の近くに私の校長住宅があったので、私も学童に接する機会が多く、また妻も指導の先生の奥さん方と交流して色々とお世話をしていた。

食糧不足を補うために青年学校の実習地二十アールを学童に提供し、農具及び肥料種子等も配分したが学童は喜んで働いてくれた。



また、青年学校では、牛、豚、鶏、羊、山羊、伝書鳩等を飼育していたが、沖縄では一家に山羊を四、五頭養っており、それを食べるのが大変なご馳走だと聞き、山羊を学童に提供したところ、とっても喜んで食べてくれた。

青年学校で栽培していた柿、栗、梨も学童のために大いに役立った。なれない土地で不安と苦しみの生活の中で、新鮮な果物が食べられたことは印象深かったようである。

未だ経験したことのない疎開生活、着る物についても苦労が多かった。アメリカ軍の上陸必至という緊迫した時の疎開であつたので、洋服等の準備もままならず、着のみのまま九州へ来たといえる。暑い沖縄から南国とはいえ冬寒い真幸にあつて齒をくいしばって耐えている学童はいじらしい限りであつた。

幸にも宿舎は青年学校の塾舎であつたので布団等も、地区の方々の提供の分もあり夜の寒さはしのぐことができた。また、大変寒い日中には青年学校の山の本を提供し囲炉裏で暖をとってもらい、何とか冬が越せた。

ついに八月十五日の終戦の日が来た。日本は占領軍の統治下におかれ再出発の道を歩み始めた。真幸に来ていた疎開学童も昭和二十一年十月末に全員元気で沖縄の古郷、今帰仁村へ帰って行った。

昭和四十六年五月、当時疎開していた沖縄の先生から手紙をいただいた。内容は沖縄招待であつた。初めのうちは迷惑をかけるので断つた。しかし何回も手紙をいただき、当時の学童の熱意に引かれて訪れることに決心した。

昭和四十六年七月二十七日から八月二日まで、元疎開学童で協議された日程で沖縄へ私達夫婦で出かけた。

(当時宮崎日日新聞に写真入りで報道された)

沖縄往復及び滞在中の経費は全額当時の学童に出し合っていたが誠に恐縮だった。

先ず七月二十八日、私共夫婦は今帰仁村の名勝・旧蹟・産業等を見学、最後に今帰仁小学校に行き、校長さん外有志、小学校の校長先生、職員、当時の疎開学童及び父母の方々三百名位の歓迎会にのぞみ、感謝状並びに

記念品をいただいた。大変盛大な歓迎会で、沖縄民謡等数々披露され時間の経つのも忘れる程であった。

その歓迎会の挨拶の中で、疎開されていた先生が「小学校の運動会の時、純白のおにぎりとテンプラを全学童に準備していただき、大変喜んで食べました。その時は誠にありがたく何万ドルにも値する食事でありました。」と、言われた。妻がいろいろ工面して準備したものであったが、そんなに喜んでいただいたかと感無量なものがあつた。

沖縄で一週間の生活は、那覇空港での「森先生ご夫婦歓迎」の大きな横断幕の驚きと感激に始まり、宿泊地では毎晩歓迎会が催され、八月二日帰途につくときは、多数の人々の見送りを受け別れをおしんでもらった。

沖縄の一週間の毎日の生活は、昔ばなしの浦島太郎のような歓待で今にその楽しさが身にしみている。



沖繩疎開児童を迎えて

家床 永友千秋

昭和十九年七月サイパン島、八月グアム島の日本軍玉砕。次はいよいよ沖繩決戦のかまえ、政府は七月全沖繩約九万人の学童と老人婦女子を本土と台湾に疎開させることを決めた。

第2回内地疎開船団の中の対島丸は不幸にも八月二十二日深夜、トカラ列島悪石島の沖で米潜水艦の魚雷攻撃で沈没、疎開児童八〇〇人を含む一、七〇〇人の中生き残り僅か二一七人だったとのこと。

高鍋に來た疎開児童たちは第四回疎開船団の貨物船三隻にすしづめで、九月二十日の暗夜那覇の港を出航、敵潜水艦に見つかからないように島陰に寄りそうようにジグザク航行であったから、船足は遅く鹿児島に着いたのは五日目のことだった。船酔いはするし食物はのどを通らず一同はぐったり疲れきっていた。

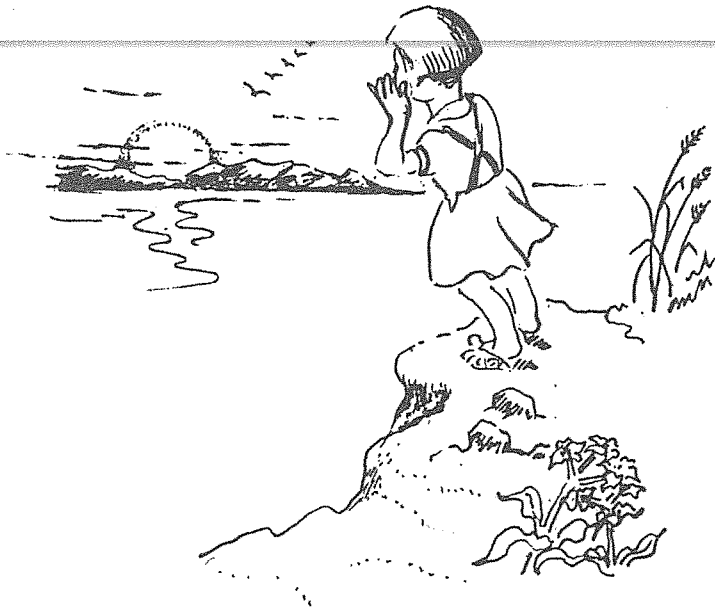
九月二十八日高鍋国民学校は南風原校組三十余名、上江国民学校（現西小）は泊校組三十余名を受け入れ

た。高鍋国民学校は堀の内の合宿訓練所、上江国民学校は二階建ての図書館の書物を片付けて畳を敷き、用水施設や便所等を増設し、従来の合宿訓練施設と併せて宿舎とした。三年生以上六年生まで各学級に二・三名ずつの疎開児童を迎え入れた。

全校職員児童はもとより、町民こぞっての親身の世話が始った。素直でまじめだった疎開児童たちは、皆から好感を持たれ、すぐによい友だちもできた。戦時中の諸物資欠乏の中から、食糧や新鮮野菜類など学校側からの連絡に応じて計画的に持ちこまれた。秋風が吹き始めると婦人会や母親学級の会員達は、冬服や下着類から夜具万般の品々を持ち寄って、南国の児童等に風邪をひかせないように様々に気配りをみせお世話を続けた。

二十年三月十八・十九日、高鍋も米軍艦載機の空襲を受け、アルコール工場は散々にやられた。上江国民学校では疎開児童の宿舎を学校に置くことは極めて危険であるということで緊急対策協議会を開いたところ、俵橋と鬼ヶ久保の両地区がすすんで半分ずつ疎開児童を引き受けていただくことになり、四月から両地区の公会堂に分

宿して通学することになった。高鍋国民学校組は引き続き堀の内宿舎だったので、堀の内や永谷地区のお世話が続いた。やがて五月十七日から両国民学校とも分散教育が始まると、地区の児童らといっしょに教育を受けた。



戦争のためとはいえ遠く親もとを離れてはるばる疎開して来た児童たちは本当にかわいそうであった。食糧や諸物資の乏しい中で、各地区の皆様は我が子同様、献身的に愛護を続けていくくださったが、爆弾や機銃弾をくぐり抜けながら仲よく助けあって、一人の事故者も出さず終戦を迎えた。沖縄帰還を許された二十一年十月末まで二年三ヵ月は長い長い月日だったが、引率の山里義厚、太田守盛両訓導と付添婦を始め六十余名の疎開児童たちを全員無事故で故郷沖縄にお送りできたことは、両国民学校職員児童一同はもとより、町民こぞの喜びであった。

涙ながらのお礼訪問

懐かしい故郷に久々の帰還だったが、取りあえず収容所に入れられた。すっかり焼き払われて家は無く、親兄弟が戦死している者や山あいの仮小屋に住んでいる者が多く、すぐには引き取られなかった。言語につくせぬ苦難のなかから復興につとめ、今日ようやく幸せになって

きた。四十九年七月南風原校組代表十四名、五十九年一月には泊校組代表六名がはるばる高鍋にお礼訪問にみえた。

「私たちが戦争で死ぬこともなく、今日こうして幸せになれたのは、高鍋の皆様にお世話になったお陰です。早くお礼に参りたかったのですがおそくなって御免なさい。」

とお世話になった地区の皆さんと涙ながらの再会、記念品を贈り、町当局や学校にも記念品の琉球焼の大壺を贈呈した。

又東小関係の小椋先生御夫妻や西小関係の永友や当時の先生方を沖繩に招待したり、同窓生を呼んで盛大な同窓会を開いたりして引き続き親交を深めていることも喜びにたえないことである。

第二部 軍隊・抑留

戦傷

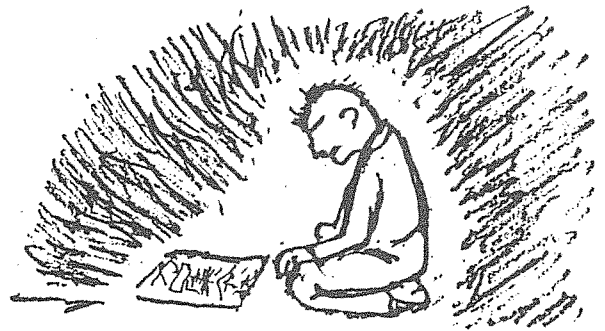
道具小路西 西村 満

昭和十二年七月七日、中国の慮溝橋で日本と中国との戦は始まり次第に拡大していった。

当時の新聞配達人は腰に鈴をつけ、「号外・号外」と言いながら走り新聞を読者宅に配っていった。私達は連勝連勝の記事を見て喜び意気が上がったものである。

当時の日本には徴兵制度というのがあり、日本男子は満二十歳になると徴兵検査を受けなければならず、甲種・乙種・丙種の三つに分かれ、有事に備える態勢をとっていた。

戦争の拡大にともない、軍は沢山の青年に召集令状を発し中国へ送った。高鍋でも「誰さんにも、誰さんにも召集令状が来たげな」と聞かれるようになったが、昭和十三年五月いよいよ私にも赤紙の令状が来た。二十一歳のときである。



入隊まで四・五日の余裕があり、その間に村人のはからいによって村の神社で武運長久祈願・三社祈願・門出の壮行会を行っていた。また、入隊当日は「御国のため」ということで、村中の人々・親類縁者によって手作りの武運長久の幟や日の丸の旗を持って駅まで見送ってもらった。

都城へ入隊すると早速戦闘訓練を受けた。三十キロ背嚢を背に軍装で六キロの行軍、実弾射撃などの訓練が続いた。そしてある日兵舎前に集合した私達に動員令

が下り、新品の軍装が支給され行進ラッパを先頭に都城を出発した。軍用列車で下関港へ着き、月明りの夜「ボーッ・ボーッ」という汽笛で日本を後にした。「長門の浦を船出して遠く御国が見えなくなった」あの『戦友』の歌を思い出し胸がジーンとなった。

船中で、中国の中部方面への戦闘に参加することが初めて我々兵士に知らされ、揚子江を上り九江へ上陸すると同時に撃ち合いが始まり以後各地へと転戦していった。

武漢三鎮作戦で急追から急追の戦闘の時であった。山間を行軍中、突如山頂から敵軍の数門のチェッコ機銃弾が打ち込まれてきた。この時は既に包囲されていて戦友はバタバタと倒れていった。敵の機銃弾着はますます正確になって草木までも銃弾によってなぎ倒され、地煙はもうもうと上がり「もうこれまで」と覚悟したとき、神の助けか飛行機の爆音が聞こえてきた。三機編隊の友軍機であり、飛行機に弱い敵兵はこれで打ち方を止め浮き足立った。我が隊は友軍であることを白布で「二」の字をつくり飛行機に知らせると共に敵を追いか

け全滅を免れた。

昭和十四年十月、徳安県長領付近の谷間を四十数名で行進していたときのことである。急に重迫撃砲弾が山の反対側から相当数打ち込まれてきた。不意をつかれたのと、山の上からのねらい撃ち、隠れる物の少ない平地であったため、帰らぬ戦友の姿が重なり合ってしまった。私はとっさに伏せたがその途端、約五メートル程の所に砲撃のさく裂音がすると同時に全身に物が突き刺さり熱いと思ったままで、気を失ってしまった。

全身の痛みで気がついてみると、右手・右大腿部、そして関節から出血している。このままではと思い左足を動かし、銃だけを持って這いながら下の田んぼを通り丘へ避難した。この間、砲弾は間をおかず発射されていたが再度当たることがなかったのが不思議であった。

間もなくして別の隊が援護にかけつけてくれ砲弾も止み、私は救出され野戦病院へ送られることとなった。一発の砲弾の破片によって私は負傷の身となり、以後二年間中国各地を経て東京へ送られ治療を続けた。

この間、野戦病院では傷の手当てはヨードチンキ、赤

チンを塗り包帯を巻きつけるだけだったこと、敵の夜襲に備えて手榴弾を抱いて寝なければならなかったこと、南京の大学病院で負傷三週間後に白衣を着せてもらいクーニヤンの看護婦から世話をしてもらいやっと生きた心地がしたこと、東京で靖国神社の例祭にお詣りしたとき、昭和天皇の行幸と一緒にあって感激したこと……等思い出は尽きない。

昭和十六年十月、私は傷痍軍人証を受け（含兵役免除）高鍋に帰って来た。思えば私にとっては長い戦傷治療の年月であった。



命の値打ち

中鶴 永友 正一郎

私は、昭和十八年十二月、特別幹部候補生の募集があり、入校と同時に一等兵、一年後には進級して兵長というので延岡まで行って受験した。検査官は、不合格、合格印を前にして、「お前はこういう気持ちで受験したか」と問われたので、「お国のために働きます」と私が言うと、「よし」と合格印が受験票に押され、私の青春時代である軍隊生活が始まることとなった。

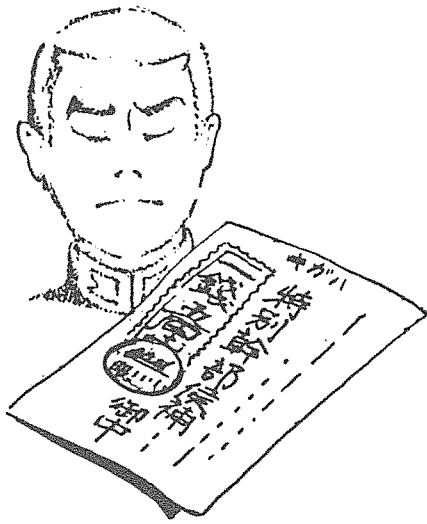
十九年四月兵庫県加古川市にあった航空通信学校に入校し、全国の中学校、専門学校から集まった若者ばかりで一年間の教育を受けた。

次は、軍隊生活の中での私の思い出である。

ある日、人事係の准尉の言葉「お前達の値打ちはどれ位するか知っているか」皆黙っていた。「お前達の命は一錢五厘の値打ちしかないのだ。一錢五厘のはがきで入校しているのであるからそれだけの値打ちだ」また、二十年三月に四国の多度津の工業学校に卒業演習に行く途

中のことであった。

高松港棧橋の鉄板に氷が張っていたが、軍靴に鉾が打ってあるので大丈夫とは思いつながらも、注意深く歩いている矢先転んでしまった。したたか尻もちをついて痛い。班長の一声「銃には傷はついていないか」私がひどく腰のあたりを打っていることには何も言わない。菊の紋章が彫印してある銃の方が私の体より大切なものであった。



多度津での演習は、送信所と受信所とが二百メートル位離れている教室を利用して行っていたが、ある日のこと、送信所から「ツウ」「ツウ」と「来い」との暗号である。私が行ってみると、部屋から焼きいもの臭いがする。班付兵長に見つかったら大変と窓を全部明けてもなかなか消えない。困っているとき「ツウツウツウツウ」の「上官が来る」の暗号。みんな観念して裁きを待った。

演習が終り、全員集合がかかり、いよいよ始まった。

「壁に向って正座せよ」と班付兵長の命令。三十分過ぎて全員起立。そして、班付は自分の履いていたスリッパで一人ひとりに往復びんたとなった。私の順番となったとき、私は十一発までは数えていたが、それからは痛さも感じなくなり何かほったをなせている位の感じしかなかった。後で頬ははれあがってみそ汁がしみた。

私達の小隊長は二等兵から少尉になり上った人でよく「日本人の根性はたたかなくてはならない」と言い、何かことある毎に二列に向かいあわせ往復びんたを強制した。ある時私は、相手からの一発目が耳に当り鼓膜を破ったらしく、他人の声が「ブルブル」というだけで聞

こえない。医務室に行くと言っただけで一週間の安静治療で寝ているだけだった。私の耳を打った相手も私も何の恨みもないのに、こんなことをやらされた。

昭和二十年五月、山口県小月飛行場に派遣された私は、班付兵長として初年兵の世話をするようになった。

初年兵といっても召集で来た人の中には頭のはげている人もいるくらい年輩だった。この初年兵がある日、そこそと耳打ちしている。聞いただと、「一人の初年兵がへまをしたので、今晚消燈時に班全員たたかれる」という。私は班長のもとへ行き「初年兵のへまは私の責任、指導の仕方が悪かったのだから、私をたたいてくれ」と申し入れた。私は自分の鼓膜を破った時の痛みを知っている、そのような行動ができたのだと思う。班長はなぐらなかつた。初年兵達は「私の息子も班付と一緒にぐらいます。」と言って喜んでくれた。

たたかれて痛いことは皆同じ、自分の思いなりにならないからといってたたく。しかも他人にたたかせることは許し難いことと私は思う。

戦争中の私

中鶴 永友 正一郎

昭和二十年、私は山口県小月飛行場の壕の中で西日本各地から送ってくる情報無線を受けておりました。

出先の情報隊は四国の足摺岬・鹿児島^{あしよりみさき}の佐多岬・五島列島の牛深^{うしぶか}・宮崎の青島等で、そこから送ってくる無線を司令部に伝える仕事でした。

壕の中には、自家発電装置・作戦室・通信室・司令部室があり、指令部室には六畳位の九州地図に各県青・赤のランプが取付けてあり、人目でどの県に何の警報が出ているか判るようになっていました。また、別の地図には私達の受けた情報で、戦闘機・爆撃機等の種類の判別を行い模型で示していました。

私は七月半ばまで青島からの無線を受けておりましたが、一番困ったのは日没現象といって電波に強弱が出るので片手はダイヤル・片手で書かねばならぬこんなことが度々でした。

よく青島にはアメリカの大編隊が入って来ておりまし

た。陸上にかかる私達の情報を受ける係の役目は終りますが、それからが宮崎地方は空襲を受けているのです。高鍋にも堀割に監視所があったようで、空襲が解除になった後で通信兵から「高鍋にグラマンが来ていましたよ」と知らせてもらったものです。

山口県から故郷高鍋の空襲を知る度に何ともいえない思いになったものです。

小月飛行場の丘から瀬戸内海を眺めておりますと、昨晩来襲したB 29が投下した機雷を掃海艇が綱を引いて一カ所に集めています。そして間もなく機関銃等で爆破する。と一面物すごい水柱が立ってすさまじかったのを覚えています。

また、飛行場から同期の飛行兵が、鹿児島^{ちゅうらん}島の知覧^{ちらん}に行くとき、飛行機で上空を三度旋回し、真白いマフラーを首に巻き、白いハンカチを振って別れを告げました。知覧^{ちらん}から往きだけの燃料しか持たない神風特攻隊の一員として出ていったのです。

こんな光景に何回となく出合い見送りました。こうして書いてきますと手を振っている同期の姿が浮かんでき

て目頭に熱いものを感じます。心からご冥福めいふくをお祈りいたします。

小月の派遣隊では、同期は小倉出身の松崎兵長でした。彼は戦争に負けたので、「死ぬ」と言ってきかない。そういう彼を説き伏せ帰郷することになりました。

駅では、東京方面から帰ってくる人で列車は満員、機関手が「ここに乗りなさい」と言ってくれたので、二人機関室に乗りました。ここは、トンネルが来ると石炭の煤煙で呼吸もできない状態でした。また下関からは電気機関車の一番前に乗りましたが、関門トンネル内は小雨が降るようで、門司港に着いた時はびしょぬれでした。

小倉で、松崎兵長のお母さんを交えて三人で話し合いましたが、彼はやはり「死ぬ」と言います。母親の「三・三日おつてくれ」との願いで三日滞在し、やっと彼の気持ちも収まったので高鍋に向かう列車に乗りました。友一人の命が助かりました。

高鍋の鉄橋が壊されているので、日向市駅で降り歩くことになりました。駅で国防婦人会のお茶の接待所が設けてありましたが、「戦争に負けて他人様の接待は受け

ない」という私の気持ちから、谷川の水でのどをうるおしがなりました。



美々津の立磐神社たていわの前にくると木炭車があり、高鍋

までいくとのこと、早速頼み込んで乗せてもらいましたが、疲れから眠ってしまい、発車したのも知らず、「高鍋に着きましたよ」との運転手さんの声で起ききました。

宮越の青木商店の叔母の家に行きましたが、そのとき叔母が「よう帰って来た」と言った言葉は今でも忘れることができません。その叔母は息子が東京の高等商船学校を卒業すると同時に学徒出陣となり、フィリピンの海戦で戦死、また私の兄も沖繩で爆撃の直撃を受け、戦死しておりましたので、私を見てこの言葉が出たのだと思います。私の戦争時代はこれで終わりました。

同じ釜の飯を食べて辛苦を共にした四期生は、宮崎県から百四十名入隊しましたが、二十三名の戦病死を数えております。そこで私は四期会を昭和四十五年に発足させ事務局を担当してお互いの絆を深くし、また毎月一日には宮崎神宮・護国神社に参拝、故人のご冥福をお祈りしています。

シベリア抑留

川田 中村 博

私は昭和二十年七月二十九歳のとき現地召集となり、満州吉林部隊きんりに入隊し奉天に向かう途中終戦となりました。そして撫順ぶじゅんで八月二十三日武装解除を終わり、ソ連軍の指示を受け行動することになりました。

十日初旬、私共はいつ日本へ送還されるかわからない不安を抱いて奉天を出発、北へ北へと列車は進み、チチハルを通過し、十月二十日黒河に到着、直ちに対岸のブラゴビシチェンスに渡りました。そして数日後、有蓋貨車十五両連結で一両に五十名位乗車させられ出発しました。毛布・糧秣りょうまつも積まれ、十月末にはかなり冷えこみ雪が薄く積もっており、貨車の真中にはストープがおいてありました。

列車の進行方向は残念ながら西に向かっています。「いよいよ日本へ帰るのは断念だ。今後はなるに任せる外ない。」と思いました。

長いシベリア鉄道は複線化されていて、一回発車する